

『雑阿含』 809 経における「鹿林梵志子」
 —『釈軌論』所引の ri dags zlog gi mdo との関連で—

堀内 俊郎

1 問題の所在

『釈軌論』第四章では大乘仏説論が詳論されるが、その際一切法無自性説と並んで議論の主題とされるのが仏身論である。その概要は、山口 [1962] によって示されており、本庄 [1992] ではその全体の翻訳がなされている。また、Lee [2001] は当該箇所を含む詳細な科段分けを伴った『釈軌論』チベット語訳テキスト校訂であり、それらによってその議論の概要が知られるようになっている。さらに、筆者は、拙稿 (堀内 [2005]) にて、『釈軌論』の仏身論の議論の前半部、特に「釈尊を變化身と見ない場合の七つの不合理」の箇所と、「釈尊の前世であるウッタラと迦葉仏との因縁譚」の箇所を、『思釈炎』における記述との比較の上で解明した。

本稿では『釈軌論』の仏身論の議論の後半部を取りあげ、主に『釈軌論』のテキスト上の問題点の指摘ならびにそこで引用されている ri dags zlog gi mdo という經典の出典の比定を行う。

本稿の概要は以下の通り。まず、『釈軌論』の仏身論の後半部は、Sāgaramegha の『菩薩地解説 (BBhVy)』という、チベット語訳にのみ現存する文献に引用されていることを指摘した。この指摘に基づいて、『釈軌論』のチベット語テキストに関して、いくつかの訂正案を示した。ところで、『釈軌論』では仏身論に関連して善巧方便説が展開されるのだが、その際世親は、大乘のみならず声聞乘においても善巧方便説が説かれていると主張し、二つの經典を引用している (文脈の詳細は本稿 2 参照)。その二つの經典のうち、第二の經典は ri dags zlog gi mdo として引用されている。Skilling [2001] は、ri dags zlog は殺戒制定のきっかけを造った人物、Migalaṇḍika(samaṇakuttaka) に相当し、この経の関連文献として SN, Vol.V.320-322 (54.9. *Vesālī*), Vin, Vol.III.68ff. を挙げている。しかし筆者は ri dags zlog gi mdo の出典は、それらよりも、上記の SN 当該經典の漢訳対応經典である『雑阿含』809 経が相応しいと考える。その際、漢訳の諸律における Migalaṇḍika-samaṇakuttaka の訳語を網羅的に検討した結果、『雑阿含』809 経に言及される「鹿林梵志子」こそが、殺戒制定の端緒となった人物に相当し、『釈軌論』で言及されている ri dags zlog に関係するという結論を得た。この『雑阿含』809 経は、しばしば殺戒に関連して言及されているが、その中の登場人物である「鹿林梵志子」に関しては従来、詳細に検討されていない。この考察によって、律と『雑阿含』の関連の一端が指摘されたことになる。

本箇所に関する先行研究は上記の本庄 [1992] と Lee [2001] が挙げられるが、後述するように Tatz [1986] もまた、実質的に本箇所に対する英訳に相当するものとなっている。

2 『釈軌論』における善巧方便説の脈絡とその関連文献

まず、この『釈軌論』の仏身論の後半部 (Lee [2001: 245.11–249.6]) の位置づけを見ておきたい。本箇所は、拙稿¹で扱った前半部 (Lee [2001: 240.12–245.10]) に対する補遺であると考えられる。文脈を確認すると、その直前の箇所では声聞は、釈尊が「私は前世ウッタラであったときに迦葉仏を誹謗 (*apavāda) したことによって今世で六年苦行した」と業の織物 (*karmaploti) を説いていることをもって釈尊を業生であると主張する。それに対して世親は、それは変化 (*nirmāṇa) 身が衆生たちに業への恐怖を生じさせるという有情教化の意図を持って述べたことであると理解し、釈尊をあくまで変化身と見ている。² それをうけて声聞が、それでは釈尊は虚偽を説いたことにならないかと反問する。そして世親が釈尊による麁悪語や殺生に過失はないと主張し、「善巧方便説」を展開するのがこの後半部である。このように、『釈軌論』の仏身論の論争は実質的に前半部で完結しており、この善巧方便説を説く後半部は付論的なものと見られる。

ここで展開されている善巧方便説に関しては、紙幅の都合で、その詳細を取りあげることとはできないため、関連文献のみ指摘しておく。まず、本庄 [1992] によって『菩薩地』「戒品」(BBh, 166) に類似する議論があることが指摘されている。さらにいえば、『撰大乘論』世親釈にも関連する記述が存する。また、Sāgaramegha の『菩薩地解説』という著作は、その名の通り『菩薩地』を解説したものであるが、その『菩薩地』(BBh, 165.26) に登場する「性罪 (prakṛtisāvadya)」なる語を注釈する際に『釈軌論』の飲酒戒論³を引用しており、また、その一フォリオ後に、同じ文脈で、『釈軌論』の善巧方便説の箇所を引用しているのである。⁴

ここで、『釈軌論』における善巧方便説を巡る関連文献をロケーションのみ挙げて図示すると、図1の通り。

¹ 堀内 [2005]. 拙稿の補足と訂正。迦葉とウッタラに関する『業事』の対応箇所は、99b9–20 → 96b9–20 (堀内 [2005: 55] 注 20)。また当該のサンスクリットとしては Nalinaksha Dutt. *Gilgit Manuscripts*. Vol.III. pt.I. p.217. さらに、『破僧事』にも同様の記述があり、こちらの方が出典として適切か。なお、*Saṅghabhedavastu*, pt.II.30. また Hofinger [1990] 参照。

² Lee [2001: 245.8–10]: sprul pa'i dngos po ni mi ston kyang las kyi rgyu ba ni gdon mi za bar bstan par bya ste/ sems can rnams las kyi 'jigs pa nyid yongs su bskyed pa'i phyir ro// 「変化 [身] の本質が説かれていなくとも、業の織物 (las kyi rgyu ba, *karmaploti) は必ず説かれるべきである。衆生たちに業への恐れを生じさせるために」

この、las kyi rgyu ba を karmaploti と想定したのは Skilling である。Karmaploti の問題については Cutler [1997] に詳しい。

³ 『釈軌論』における世親の飲酒観の特徴とその『順正理論』への影響に関しては堀内 [2004] 参照。Sāgaramegha は特に性罪 (prakṛtisāvadya) と遮罪 (pratiksapaṇasāvadya) の定義に着目して、『釈軌論』における飲酒観を引用し、同じ脈絡の元で菩薩の善巧方便説を展開したと見られる。

⁴ Sāgaramegha の『菩薩地解説』に関しては、羽田野、藤田、Tatz 氏の研究、言及がある。特に Tatz [1986], Appendix C (321–322) には、Alcohol というサブタイトルで、『菩薩地解説』、Jinaputra の『菩薩地戒品注釈』(これは『菩薩地解説』の「戒品」の異本であることが藤田、羽田野氏により指摘されている) の飲酒戒論が訳出されており、Appendix D (322–327) Permission to Murder Etc. では善巧方便に関する箇所の英訳がなされている。この意味で Tatz は、『釈軌論』の本箇所の英訳を実質的に提供していることになる。

『雑阿含』809 経における「鹿林梵志子」

		『釈軌論』 (ch.3 染心飲酒性罪説)	→	『順正理論』
		'' (//)	→	『菩薩地解説』(D166a3-166b3)
『菩薩地戒品』	→	'' (ch.4 善巧方便説)	→	'' (D167b1-169a2)
''	→		→	『撰大乘論釈』(D172b2-6, P209a6-209b3)

図 1

特に、従来『釈軌論』との関連が指摘されることがなかった『菩薩地解説』によって『釈軌論』のチベット語訳に対する異読に相当するものが得られるので、以下では適宜、『釈軌論』解説の参考資料として用いる。

3 善巧方便説に関する「二つの経典」

本節では続く議論を訳出し、テキスト上の問題を指摘し、そこで言及されている経典の出典を考察する。

【声聞】彼を見捨てる（善巧方便によって殺すという）心、それこそがこの場合、貪なのではないのか。

【世親】(a) この [人] を苦という大河から救済することを望むことによって、(中略)
(b) *gzhan yang/*

*snying brtse ba'i bdag nyid dag gis sbyor ba gang gis/
phan phyir gzhan gsod de ni skyon can na//
gang gis dge slong⁵ drug cu la sogs shi//
mdo gnyis thub pas bstan pa de ci'i phyir//*

さらにまた、

「あわれみ (**karuṇā*) を本性とするものたちが、ある行いによって、利益するために他人を殺すそのことが瑕疵を持つのであれば、その [行い (説法)] によって六十人の比丘 (*dge slong*) などが死んだ [と]、ムニによる二つの経典 [で] 説かれている、それはなぜか」

また、「二つの経典」とは、

- (1) ある [経典] で、「この法門が説かれたときに、六十人の比丘が口から熱血を吐き、その同じ障害によって死んだ」と出ている『*ljon shing gi phung po lta bu*』⁶ と、
- (2) ある [経典] で、「世尊は比丘たちに、比丘たちよ、不浄 [観] を修しなさい。不

⁵ 『釈軌論』では *dge sbyong* (沙門) となっており異読はない。しかし後で引用されている二つの経典では死んだのは比丘 (*dge slong*) たちであり、沙門 (*dge sbyong*) たちではない。また『菩薩地解説 (BBhVy)』での引用も *dge slong* (比丘) を支持する (注 8 参照)。

⁶ 本経の出典は『中阿含』「木積喻経」(大正 1.427a3-5)、『増一阿含』33-10 (大正 2.679c1-2)、AN, VII.68 Aggi Vol.IV.135 である。なお、川崎 [1992: 204] によれば、この同じ経典は『思釈炎』第十章では「*shing gi phung po lta bu'i mdo sde*」という名で引用されており、すでに同 [1992: 208] 注 4 によって漢訳、パリーの資料が紹介されている。

さらに関連文献を挙げると、『四分律』卷六十。大正 22.1011b、『文殊師利問経』下卷。大正 14.501c。

淨 [観] に親しみ (bsten, *ā√sev)」乃至、「大利益がある」⁷ というに至るまで不淨 [観] に親しみ不淨 [観] を修する称賛が説かれているのと、「その時比丘たちは不淨 [観] を修し、不淨 [観] を修した時に、膿の [満ちた] この身体に恥じて」乃至、「自刃し、比丘が比丘を [自分で] 殺す (自殺する)」に至るまで出ている『*ri dags zlog gi mdo*』である。

まず、チベット語の原文を挙げた「さらにまた」に続く四行の文章を検討する。Lee [2001: 248] は中央の 2 pāda 分のみを頌と見ており、段落を分けている。しかし筆者は、この箇所はサンスクリット原典では「さらにまた (gzhan yang)」を導入句とする頌、すなわち前後一行ずつあわせて四行全体で頌であったと考える。根拠は、(1) 次の四行目 (pāda d) も 9 シラブルとなっていること、(2) BBhVy (『菩薩地解説』) には頌として引用されていることである。⁸ また、根拠としては少し弱いのが、(3) この直後に、「また、『二つの経典』とは」と、先の四行の中の「二つの経典」という語に対する注釈的な文章が続いていることも、これが一種のまとめの頌に相当することの傍証となろうか。ただ、第一 pāda は 11 シラブルであり、形式が整っていないが、上記の理由で原文は頌であったと推測される。さらに、Skilling [2001: 338] の Appendix 2.2. Introductory phrases to verses によると、P (北京版) 48a8 に gzhan yang の導入句のもと、頌が挙げられており (Lee [2001: 39]), gzhan yang を導入句として頌を引くという用例は、他に確認される。

次に、本箇所の文脈を確認しておく。声聞は、『善巧方便経』には「無貪などより生じた殺生は無罪である」と説かれているが、これは正しい認識手段 (*pramāṇa) ではないと主張する。それに対して世親は、そのようであるならば、釈尊の説法をきっかけとして六十人の比丘たちが死んだという二つの経典が声聞乗において説かれているが、それも正しい認識手段ではないことになってしまうであろうと反論し、『善巧方便経』の説を擁護し、先のウッタラと迦葉仏に関する釈尊の言葉に過失はないと主張するとするというのが、この二つの経典が引用されている脈絡である。

4 ri dags zlog gi mdo について

4.1 Migalaṅḍika-samaṇakuttaka

本節では善巧方便説に関する「二つの経典」の二つ目である「ri dags zlog gi mdo」の出典を考察する。⁹

⁷ 本庄 [1992] 注 93 では、『雑阿含』27,741 (大正 2.197ab) が挙げられている (パーリ対応は SN, 46.67.Asubha (Vol.V.132)). 漢訳の前半部に関しては類似しているが、本箇所の出典ではない。

⁸ BBhVy, D186b3-4, P208a2-3: gzhan yang
 'byor pa gang gis bdag nyid 'chi ba phan par mthong//
 de ni snying brtse'i bdag nyid ldan pa rnam kyi yin//
 gang phyir dge slong drug cu la sogs shi bar 'gyur//
 mdo sde gnyis las de ni thub pas ma gsungs sam//

⁹ Lee [2001: 248.17] は ri ngags zlog gi mdo と記している。

Skilling [2001: 344]によると、Ri dags (=mr̥ga) zlog は Migalaṇḍika¹⁰ (samaṇakuttaka) に相当する。そして Vin, Vol.III.68; SN, Vol.V.320 が関連文献として挙げられ、*Vinayavibhaṅga* (P No.1032.Vol.42, 119a7. 後述の『説一切有部毘奈耶』に相当) では ri dags zlog dge sbyong sbed という名が確認されることが指摘されている。

しかし、筆者は、この ri dags zlog gi mdo の出典は Skilling の指摘する律 (Vin, Vol.III.68) や SN, Vol.V.320 ではなく、SN 当該経典の漢訳対応『雑阿含』809 経であると考え。すなわち『雑阿含』809 経には「鹿林 (梵志子)」という人物への言及があるのだが、その鹿林なる語が ri dags zlog に関連すると推定するのである。

『釈軌論』における ri dags zlog なる語の詳細は本稿 4.2 で考察するが、Skilling の指摘するように、*Vinayavibhaṅga* に ri dags zlog dge sbyong sbed とあり、その人物は殺生戒に関連する人物であることから、ひとまずこの ri dags zlog は律の殺生戒に関する記述に登場する Migalaṇḍika であると想定した上で、考察を進める。(以下は、『雑阿含』809 経における「鹿林梵志子」という語を検討するための予備的考察に当たる。)

まず、この Migalaṇḍika-samaṇakuttaka¹¹ という人物に関する逸話を紹介する。釈尊が説かれた不浄観を比丘たちが修したところ、比丘たちは自分の身体に恥じ、自殺し、あるいはこの Migalaṇḍika-samaṇakuttaka に殺してもらった。その数は計六十人に及んだ。仏、それを聞き及ぶに至り、不浄観ではなく数息観を修せよと教示し、また殺戒を制定されたこと、律に説かれている。このように、この人は、『律』の因縁譚に登場し、殺戒が制定されるきっかけを作ったとされる人物である。

次に、Migalaṇḍika-samaṇakuttaka の漢訳名を検討する。まず、『赤沼辞典』, 424a によると、Migalaṇḍika は鹿の糞の義であり、samaṇakuttaka (似非沙門) の名であるという。そして、典拠として VP (= Vinaya-Pitaka) , III.68–70 が挙げられており、「仏の不浄観を説き給ふや、比丘等厭世の余り、この比丘の処へ来りて命を断たんことを乞ふ。衣鉢の欲のために比丘等の命を絶つ」と説明されている。さらに、各律における訳名として、『五分 [律]』(大正 22.7b) : 彌隣旃陀羅, 『四分 [律]』(大正 22.575c) : 勿力伽難提¹², 『十誦律]』(大正 23.7c) : 鹿杖 (梵志), 『有部毘奈耶 (根本説一切有部毘奈耶)』(大正 23.659c) : 鹿杖梵志沙門, 梵志¹³, 『鼻奈耶』(大正 24.855b) : 沙門崛, 『僧祇 (摩訶僧祇律)』(大正 22.254b) : 鹿杖外道, が挙げられている。

ただ、赤沼師は『鼻奈耶』における Migalaṇḍika-samaṇakuttaka の呼び名 (訳名) として「沙門崛」を挙げ、「然し沙門崛は Samaṇakuttaka にて似非沙門の義なり」と述べ、『鼻奈耶』では「Migalaṇḍika」に対応するものがないかのように記されている。確かに数ヶ所

¹⁰ Skilling は migalaṇḍikā とするが、パーリには migalaṇḍika とある。

¹¹ このハイフンは、この語がコンパウンドであることを必ずしも示すものではない。

¹² これは音写であろう。*mr̥ganandika。

¹³ 赤沼師は「鹿杖」とのみ記すが、詳しくは「鹿杖梵志沙門」とあり、また「梵志」という表記もある (大正 23.660a1)。

(『鼻奈耶』大正 24.855b7, 9) では「沙門崛比丘」という呼び名があるものの、他方、二箇所(大正 24.855b5, 855c13) では「獵師種沙門崛比丘」とも呼ばれている。すると、『鼻奈耶』では、Migalaṇḍika-samaṇakuttaka を「獵師種沙門崛(比丘)」と訳したものと考えられ、『鼻奈耶』における彼の呼称は「沙門崛」ではなく、「獵師種沙門崛(比丘)」とするのが適切であろう。その場合、「獵師種」なる語をさらに検討する必要があるが、これは以下の理由で Migalaṇḍika の訳語と推定される。即ち、Migalaṇḍika は確かに鹿の糞の意味であるがそれに近い形の、Migaluddaka で獵師という意味になるので、本箇所の原文に Migaluddaka とあったか、あるいは翻訳者がそのように理解したと見ると、この獵師なる語は説明がゆく。ただしその場合でも獵師種の「種」には疑問が残るが、種族、職業名を表すか。

また波羅夷中の「殺戒」を詳細に研究した平川 [1993: 255–298] esp. 255–256, 264 とその注には、各部派の律における対応箇所が列挙されている。挙げられている資料は上記とほぼ同じであるが、その中で新たに紹介されている説出世部の『梵文戒経』では、Mṛgalaṇḍika-parivrājaka (漢訳では「鹿杖外道」『摩訶僧祇律大比丘戒本』大正 22.549c) なる名が存することが注目される。¹⁴ 他方、PPND, 625 では Vin, iii.68ff. の他に Sp (= *Sāratthappakāsini*) , ii.399ff. が挙げられている。

付け加えるなら *Samantapāsādikā*, 399–401, 435 では Migaladdhika-samaṇakuttaka という名になっており(ただし同 399, 注 10 によると -laṇḍika- の読みもある)、漢訳では「鹿杖沙門」と訳されている(『善見律毘婆沙』卷十)。¹⁵

以上のように、殺戒に関連して登場するこの人物の名は、*Vinaya*, *Sāratthappakāsini* では「Migalaṇḍika-samaṇakuttaka」とされていた(*Samantapāsādikā* では Migaladdhika-samaṇakuttaka となっているが、Migalaṇḍika の異読もある)。他方、説出世部の『梵文戒経』では Mṛgalaṇḍika-parivrājaka という名が確認された。

すると、この人物の名にはおおよそ Migalaṇḍika-samaṇakuttaka と Mṛgalaṇḍika-parivrājaka という二つの原名が考えられることになる。

この事実をもとに、この人物に対する漢訳の訳語を考察する。まず名前前半部(Migalaṇḍika/daṇḍika)に関する諸訳の訳語を比較検討する。上記の文献の内、『十誦律』『有部毘奈耶』『僧祇』『摩訶僧祇律大比丘戒本』『善見律毘婆沙』の五つでは「鹿杖」なる訳語があった。平川 [1993] の指摘によれば、『摩訶僧祇律大比丘戒本』は説出世部の『梵文戒経』とよく合致するという。その梵文に Mṛgalaṇḍika-parivrājaka とあることから、『摩訶僧祇律大比丘戒本』の鹿杖の原語は Mṛgalaṇḍika と推定されうが、さらに、他の四書における「鹿杖」に関してもその原語が推定できよう。次に、後半部(samaṇakuttaka/ parivrājaka)の漢訳語を検討する。『鼻奈耶』の「沙門崛」は赤沼師の指摘の通り samaṇakuttaka に対応する。また『善見律毘婆沙』の「沙門」も同様であろう。他方、『十誦律』の「梵志」、『僧

¹⁴ 平川 [1993: 266–267]. N. Tatia, *Lokottaramahāsāṃghikānāṃ Prātimokṣasūtram*, p.7.

¹⁵ ただ、ここでは彼が殺した比丘の数は六十人ではなく五百人とされている(*Samantapāsādikā*, 401).

祇』の「外道」、『有部毘奈耶』の「梵志沙門」「梵志」を *samaṇakuttaka* の訳語であるとするのには無理があり、またそもそもこの *kuttaka* なる語はサンスクリットの辞書には見られず、不明である。¹⁶ そこで、この語に関しても『摩訶僧祇律大比丘戒本』とその梵文を参照すると、漢訳では「外道」とあり、梵文では *parivrājaka* とある。そしてその *parivrājaka* が「梵志」や「外道」と訳される例は現に確認される。¹⁷ このように考えると、『摩訶僧祇律大比丘戒本』のみならず、『十誦律』『僧祇』『有部毘奈耶』も後半部には *parivrājaka* とあったと推定されうる。

以上の検討により確実に指摘できることは、(1) この六十人の比丘を殺した人の名前には、おおよそ *Migalaṇḍika-samaṇakuttaka* と *Mṛgadaṇḍika-parivrājaka* という二通りの名前(異なった伝承)があること、(2) その名前の前半部に関して、「鹿杖」なる訳語が与えられている例が五例確認されること、(3) 後半部が「梵志」「梵志沙門」「外道」と訳されていた例があるという三点である。

また、『摩訶僧祇律大比丘戒本』には「鹿杖外道」とあるが、対応するサンスクリットでは *Mṛgadaṇḍika-parivrājaka* とあることから推測すると、同様に、『十誦律』の「鹿杖(梵志)」、『有部毘奈耶』の「鹿杖梵志沙門(梵志)」、『僧祇』の「鹿杖外道」も、原文には *Mṛgadaṇḍika-parivrājaka* とあったとも考えられる。

4.2 ri dags zlog gi mdo の出典

さて、前節では Skilling [2001] に従って『釈軌論』における *ri dags zlog gi mdo* の *ri dags zlog* を、殺戒制定のきっかけとなった人物という前提で議論を進めたが、前節での考察により、その人物の原名として *Migalaṇḍika-samaṇakuttaka* あるいは *Mṛgadaṇḍika-parivrājaka* という語が確認されたことを踏まえて、この語句についてさらに検討する。まず、*ri dags* は **mṛga* の訳語である。他方、*Vinayavibhaṅga* における *ri dags zlog dge sbyong sbed* という訳語の中、*dge sbyong* は **samaṇa* (**śramaṇa*) であろうから、この *Vinayavibhaṅga* の *ri dags zlog dge sbyong sbed* は *Mṛgadaṇḍika-parivrājaka* ではなく、*Migalaṇḍika-samaṇakuttaka* を訳したものと考えられ、*zlog* は *laṇḍika* に対応するものと判断される。¹⁸ いずれにせよ、*Vinayavibhaṅga* の *ri dags zlog (dge sbyong sbed)* は *Migalaṇḍika(-samaṇakuttaka)* に対応すると考えられることから、『釈軌論』の *ri dags zlog gi mdo* も **Mṛgalaṇḍika-sūtra* と想定できよう。ただ、先に指摘したように『菩薩地解説 (BBhVy)』は『釈軌論』の本箇所を

¹⁶ *The Pāli Text Society's Pāli-English Dictionary*, s.v. *kuttaka* では adj. “made up”, pretending, in *samaṇa-k. a sham ascetic*. Vin III.68–71 とある。

¹⁷ 『瑜伽論』『声聞地』では *parivrājaka* が「外道」と訳されている。*Śrāvakabhūmi* (Shukla, K. ed., Patna: 1991), 342.8, 大正 29.447b. また、『八千頌般若』の *Śreṇika-parivrājaka* (AAA, 50.15-16 etc.) が、玄奘の『大般若』(大正 5.209b etc.) では「勝軍梵志」と訳され、羅什の『小品般若』(大正 8.537c etc.) では「先尼梵志」と訳されているように、*parivrājaka* には「梵志」の訳例もある。

¹⁸ 「sbed (隠す)」は **√gup* であるので、*kuttaka* が、それに近い形の *guptaka* となって *sbed* と訳されたのであろうか。しかし、*laṇḍa*, *laṇḍikā* (pāli), *laṇḍa*, *laṇḍaka* (skt.) は「糞 (*dung*, excrement)」の意味であるが、それがどうして *zlog* (かえらせる, 滅する, **ni-√vrt?*) とされたのかという点については不明である。

引用しているのだが、その対応箇所 (D168b6) では本経は「dbyug pas (*daṇḍena) ri dags (*mṛga) 'chor gyi mdo」として引用されており、Mṛgadaṇḍika-parivrājaka の一部を構成する *Mṛgadaṇḍika がその原語に含まれていることが推定される (これを直訳すると「杖によって鹿が逃げる ('chor) 経典」となるうか)。その場合、『釈軌論』における ri dags zlog も Mṛgadaṇḍika の訳語であるという可能性も否定できない。

次に、これまでの考察を踏まえた上で、Vin, Vol.III.68, SN, Vol.V.320 ならびに SN 当該経典の漢訳対応『雑阿含』809 経の三書と比較検討し、『釈軌論』の ri dags zlog gi mdo が『雑阿含』809 経に対応することを示す。

『釈軌論』所引の ri dags zlog gi mdo の内容は本稿 3 で挙げたが、再び挙げておく。

(2) ある [経典] で、「世尊は比丘たちに、比丘たちよ、不浄 [観] を修しなさい。不浄 [観] に親しみ」乃至、「大利益がある」というに至るまで不浄 [観] に親しみ不浄 [観] を修する称賛が説かれているのと、「その時比丘たちは不浄 [観] を修し、不浄 [観] を修した時に、膿の [満ちた] この身体に恥じて」乃至、「自刃し、比丘が比丘を [自分で] 殺す (自殺する)」に至るまで出ている『ri dags zlog gi mdo』である。

次に、順に律、SN の該当箇所、『雑阿含』809 経を挙げる (下線部注意)。

a. Vin, Vol.III.68ff.: tena kho pana samayena bhagavā bhikkhūnaṃ anekapariyāyena asubhakathaṃ katheti asubhāya vaṇṇaṃ bhāsati asubhabhāvanāya vaṇṇaṃ bhāsati ... Te sakena kāyena aṭṭiyanti harayanti jigucchanti ... evam eva te bhikkhū sakena kāyena aṭṭiyantā harāyantā jigucchantā attanāpi attanaṃ jīvitā voropenti aññamaññaṃ pi jīvitā voropenti Migalaṇḍikaṃ pi samaṇakuttakaṃ upasaṃkamitvā evaṃ vadanti: sādhu no āvuso jīvitā voropehi, idan te pattacīvaraṃ bhavissatīti ... saṭṭhiṃ pi bhikkhū ekāhena jīvitā voropesi (... は省略を示す)

b. SN, 54.9. *Vesālī*: そのとき世尊は比丘たちに、多くの方法で不浄の話を語られた。不浄の称賛を語られた。不浄を修することの称賛を語られた。(中略) 彼ら (比丘) は身体に悩み、恥じ、厭いつつ、刺客を求める。ある一日、十の比丘も自刃する。二十 [の比丘も]。ある一日、三十 [の比丘も] 自刃する。¹⁹

c. 『雑阿含』809 経 (金剛経) (大正 2.207b21-c19): 如是我聞。一時仏住金剛聚落。摩河側。薩羅梨林中。爾時世尊為諸比丘。說不淨觀。讚歎不淨觀言。諸比丘修不淨觀。多修習者。得大果大福利。時諸比丘。修不淨觀已。極厭患身。或以刀自殺。或服毒藥。或繩自絞。投巖自殺。或令余比丘殺。

有異比丘。極生厭患。惡露不淨至鹿林梵志子所。語鹿林梵志子言。賢首。汝能殺我

¹⁹ SN, Vol.V.320-322: tena kho pana samayena Bhagavā bhikkhūnaṃ anekapariyāyena asubhakathaṃ katheti/ asubhāya vaṇṇaṃ bhāsati asubhabhāvanāya vaṇṇaṃ bhāsati// ... Te iminā kāyena aṭṭiyāmanā harāyamānā jigucchamānā satthahāraṃ pariyesanti/ dasa (sic. dssa) pi bhikkhū ekāhena sattham āharanti. vīsam pi ..la.. tiṃsam pi ekāhena sattham āharanti.

者。衣鉢属汝。時鹿林梵志子。即殺彼比丘。…時鹿林梵志子。即以利刀。殺彼比丘。次第乃至殺六十人。…（波線部の意味は後述）

このように、この三書には類似する記述があり、いずれも『釈軌論』における *ri dags zlog gi mdo* の出典として相応しいように思われる。しかし、まず、世親が律の当該箇所を *ri dags zlog gi mdo*（経）と呼んでいるという可能性は低い。なぜなら世親は律は律として引用することが多く、律を経として引用する例は確認されないから。²⁰ 次に、SN 当該箇所には *Migalaṇḍika(-samaṇakuttaka) / Mrgaḍaṇḍika(-parivrājaka)* という名は出ないため、これは *ri dags zlog gi mdo* として引用されている本箇所の出典ではない。²¹

次に、三書を比較すると、パーリでは比丘たちは自刃したとされているが、漢訳では「鹿林梵志子」が、律では *Migalaṇḍika-samaṇakuttaka* が六十人の比丘を殺したになっている。また、前半部の記述は漢訳、パーリ、律に共通しているが、漢訳と律の後半部の記述はパーリには存在しない。

図表により、状況を整理しよう。（表 1 参照）

図表上段の記述は三書ともに一致する。その点で『赤沼目録』などの指摘の通り、SN, 54.9 は『雑阿含』809 経に相当する。また、SN, 54.9 には *Migalaṇḍika-samaṇakuttaka / Mrgaḍaṇḍika-parivrājaka* なる人名は現れないものの、その注釈では彼に言及しており、律でも説かれるかの殺生の事件のことを念頭においていることが伺える。他方、『雑阿含』809 経には「鹿林梵志子」なる人名が言及されており、彼が比丘たちを殺したとされている。

このような文献的状况から、『雑阿含』当該経には殺戒を説いた律の記述と同じこ

²⁰ 例えば『釈軌論』では *'dul ba las* という例が一箇所見られる。（Lee [2001: 241.1]）

また、『縁起経釈』では、「律にて (*'dul ba las*)」と述べた上で、「假令百劫を経んとも 所作の業は亡びじ」云々という有名な頌を引用している（PSVy, D43a2-3, P49a4-5（有 (bhava) 支の分別): *'dul ba las/ las rnam chud zar mi 'gyur te/ bskal pa dag ni brgya na yang/ tshogs shing dus dang ldan pa na/ lus can rnam la 'bras bu smin//*). ちなみに、世親はこの頌を好んだらしく、『成業論』でも引用している（室寺校訂本 16）。その『成業論』では「世尊によって (*bcom ldan 'das kyis*)（説かれた）」として言及されており、Lamotte はこの関連文献として *Divyāvadāna*（九回引用されるという）、*Bodhicaryāvatārapañjikā*, ix.71 (=226.28-29)、*Abhidharmakośavyākhyā*, 221a9 (=280.7, pāda c, d のみ)、*Madhyamakavṛtti*, 324 を挙げている (*Karmasiddhiprakaraṇa The Treatise on Action by Vasubandhu*, Étienne Lamotte, tr. by Leo M. Pruden, Asian Humanities Press California, 1988, 105)。しかし、同じ世親が『縁起経釈』において「律にて」と明言していることからして、律が出典であろう。特に『破僧事』や『菓事』に散見される。例えば、*Saṅghabhedavastu*, pt.II, 117, 157, 158, 159; Nalinaksha Dutt. ed., *Gilgit Manuscripts*. Vol. III. pt.I. 108: *na praṇāsyanti karmāny api kalpaśatair api// sāmagrīm prāpya kālaṃ ca phalanti khalu dehinām//* ところで Lamotte の指摘する諸文献では、pāda b は *kalpakoṭīśatair api* となっており、律における引用 (*api kalpaśatair api*) とは異なっているが、『縁起経釈』と『成業論』所引の経文も、律の文章の方が原文として相応しいと思われる。

²¹ ただ、注釈には *Migalaṇḍika-samaṇakuttaka* への言及がある（下線部）。*Sāratthappakāsinī*, Vol.III.268: *satthahāraṃ pariyesantī, jīvitaharaṇakasattham pariyesanti. Na kevalaṃ ca te sattham pariyesitvā attānaṃ va attānaṃ jīvitā voropenti, Migalaṇḍikaṃ pana samaṇakuttakaṃ upasaṅkamitvā**, Sādhu no, āvuso, jīvitā voropēhīti vadanti....（イタリクスは SN 本文）*sic. upasan-

	Vinaya*	SN, 54.9	『雑阿含』 809 経
不浄観の説法を機縁に六十人の比丘が自殺した/死んだ	○	○	○
その際、他人に幫助してもらった (その名前)	○ (Migalaṇḍika-samaṇakuttaka)	×**	○ (鹿林梵志子)

*この記述は各律に共通であるが、パーリ原名が記載されているため、パーリの Vinaya のみを挙げた。

**ただし注釈は Migalaṇḍika-samaṇakuttaka に言及する (注 22 参照)。

表 1

とが説かれているものと判断され、この「鹿林梵志子」は Migalaṇḍika-samaṇakuttaka / Mrgalaṇḍika-parivrājaka の訳語であると考えられる。²²

さて、これを具体的に検証する手続きとしては、通常、「鹿林梵志子」に対応するサンスクリットを想定するという方法が採られるであろう。しかし、鹿林梵志子 = *Migavana-brāhmaṇaputta (skt. *Mṛgavana-brāhmaṇaputra) や、それに類似するような人名は各種辞書に記載されていない。そこで、この「鹿林梵志子」は Migalaṇḍika-samaṇakuttaka / Mrgalaṇḍika-parivrājaka の訳語であるという前提で考えると、まず、後半部の「梵志子」は、parivrājaka の訳であると見てよいであろう。前節で検討したように、『十誦律』には梵志、『有部毘奈耶』には梵志沙門 (梵志) という訳語があり、その場合 parivrājaka が想定されたから (ただし「子」には疑問が残るが)。

ところが、前半部の「鹿林」を Mṛga-laṇḍika (daṇḍika) の訳語と見ることには無理がある。また逆に、漢訳における Mi(r)ga-laṇḍika/daṇḍika の訳例は、すべて同じというわけではなかったが、「鹿杖」が多く、またそれ以外の訳例 (勿力伽難提など) も、Mi(r)galaṇḍika/daṇḍika から遠くない範囲のものとして説明できる程度の異読であったので、彼の人物が Mṛgavana と伝承されたということも考えにくい。

そこで、「鹿林」を起点に考えるのではなく、逆に、漢訳の方の伝承に問題があったと考えてはどうであろうか。つまり、『雑阿含』809 経の原本には *Mrgalaṇḍika とあった。それが「鹿杖」と訳された。しかし当初は「鹿杖」とあったものが、「鹿林」と伝承されたというように、残念ながら大正蔵、高麗蔵にも異読はないが、『雑阿含』当該経は上記の律 (各律に共通) の記述と呼応し、その際名前前半部が「鹿杖」と訳されていた例が五例あったという文献的状況や、Mṛgavana やそれに近い名前も確認されないということから、そのように推定しうるのである。付け加えるなら、前節 (5.1) で挙げた『根本説一切

²² 『雑阿含』は翻訳文献であることに注意が必要である。ところで、この『雑阿含』809 経は殺戒との関連でしばしば言及されている。そのなか、Pachow [1955: 16] は、この「鹿林梵志子」を「Mṛgavana Brahmin」と還梵している。この場合、上記の人物と同一人物だが違う人名と見るのか、あるいは別人と見るのだろうか。いずれにせよそのような名前は各種辞典に記載されていないことは確かである。

有部毘奈耶』では「鹿杖梵志沙門」の訳語があったが、大正蔵ではその中「杖」という語に注が施されており、それによると、宮内庁版では「杖＝林」となっているという（大正 23.659. 注 9）。つまり、『雑阿含』のこの箇所ではないが、鹿「杖」が鹿「林」と伝承されているという異読は、実際に確認され、筆者の推定に対する裏付けの一つとなる。

以上、まとめると、『雑阿含』809 経の「鹿杖梵志子」は元は「鹿杖梵志子」とあったものであり、Mṛgadaṇḍika-parivrājaka の訳語であると推測されるということである。

さて、内容面からみて『雑阿含』809 経が『釈軌論』所引の經典に対応することは確かであろうが、さらに、経名の観点からも、『釈軌論』の ri dags zlog (gi mdo) が『雑阿含』809 経の「鹿杖（杖）」梵志子に関連すると考えられる。確かに、先に見たように ri dags zlog は *Vinayavibhaṅga* との関連からすると、*Mi(r)galaṇḍika（鹿（あるいは野生動物）の糞）が原語として想定され、その場合、この *Mi(r)galaṇḍika は、Mṛgadaṇḍika の訳と目される『雑阿含』809 経の「鹿杖」（「鹿杖」）とは一見、関連しないように思われる。

だが、これに関しては以下の三通りの説明が可能である。

(1) 前節で詳しく検討したように、殺戒制定のきっかけを作った人物の原語には、Mṛgadaṇḍika のみならず、Migalaṇḍika という名も確認され、後者の用例の方が多かった。しかしそれにも関わらず、漢訳文献で件の人物が鹿糞と訳された例は見出されなかった。また、*Samantapāsādikā*, 399–401, 435 では Migaladhika-samaṇakuttaka あるいは Migalaṇḍika-samaṇakuttaka という名があったが、その対応漢訳『善見律毘婆沙』巻十では「鹿杖沙門」と訳されていたのであった。すると、『雑阿含』809 経の原本に Mrgalaṇḍika とあったものが「鹿杖」と訳された（そして鹿杖と伝承された）可能性がある。その場合、世親がその『雑阿含』809 経（相当の有部阿含）を、登場人物の名を取って Mrgalaṇḍika 経として引用したということであろう。

(2) あるいは、『雑阿含』の原本となった有部阿含と世親の見ていた有部阿含が同一ではなかったということも考えられるので、その場合、『雑阿含』809 経相当の阿含に Mṛgadaṇḍika とあり、他方『釈軌論』で依用された阿含では Mrgalaṇḍika とあったとしても、そのことは、両書の指示するテキスト（原典）が同じであったという想定を妨げない。

(3) あるいはまた、Sāgaramegha の『菩薩地解説』では『釈軌論』の ri dags zlog gi mgo に相当する箇所に「dbyug pas (*daṇḍena) ri dags (*mṛga) 'chor gyi mdo」とあり、その一部に *Mṛgadaṇḍa(/-daṇḍika)（鹿杖）という語が含まれていたことが注目に値する。本稿では Skilling [2001] により指摘された *Vinayavibhaṅga* における ri dags zlog (dge sbyong sbed) という語を元にして、『釈軌論』の ri dags zlog を Mi(r)galaṇḍika と想定した。しかし、『菩薩地解説』での引用を参考にして、『釈軌論』の ri dags zlog も Mṛgadaṇḍika の訳であったと考えれば、『雑阿含』809 経の「鹿杖（杖）」に一致することになる。

以上まとめると、内容の面から『雑阿含』809 経が『釈軌論』所引の ri dags zlog gi mdo に対応することは明らかであるが、上述の想定によれば、経名の観点からも、その一致が指摘できることになろう。

さらに傍証を挙げれば、最初に指摘したとおり、Sāgaramegha は『菩薩地解説 (BBhVy)』で『釈軌論』の善巧方便説を引用しているのだが、その際本経については少し経文を補って引用している。そしてその補いの箇所（波線部）は、SN 該当經典にはなく、『雑阿含』809 経にのみ存するのである。²³ 先の『雑阿含』波線部下線部と比較されたい。

その時比丘たちは不浄を修する。不浄を修し、この膿 [に満ちた] 身体を恥じ、非難する。それを呪うに至るまでなし、[あるものは] 刀も²⁴ 求め、毒も飲み、崖底にも飛び込み、繩によっても [首を] 絞め、死にもすることによって、比丘たちが [自分で] 比丘たちを殺すに至るまでなし。²⁵

以上のことから、『釈軌論』の ri dags zlog gi mdo = *Mṛgalaṅḍika-sūtra は、律や SN ではなく、『雑阿含』809 経（に相当する有部阿含）であったと結論づけられる。

5 むすび

本稿での考察により得られた結論は以下の通り。

『釈軌論』における善巧方便説関連文献としては『菩薩地』『撰大乘論釈』『菩薩地解説』があり、特に Sāgaramegha の『菩薩地解説』は、『釈軌論』当該箇所を、『釈軌論』の飲酒戒論と共に引用していることを指摘した。この『菩薩地解説』との比較にもとづいて、『釈軌論』(D113b7-114a1) の gzhan yang で始まる四行は、本来は頌であったと推定した。

世親が声聞乘において善巧方便を説いている經典の例として引用している「二つの經典」のうち、二つ目の ri dags zlog gi mdo = *Mṛgalaṅḍika-sūtra は『雑阿含』809 経（相当の有部阿含）に相当する。その際、『雑阿含』809 経には「鹿林梵志子」とあるが、関連文献との関係から、この語は Mṛgalaṅḍika-parivrājaka の訳語であると考えられ、元は「鹿杖梵志子」とあったものと論定した。

<テキスト編>²⁶

²³ ただし、パーリの Vinaya を除く漢訳、チベット語訳の律では波線部の記述は存する。しかし、上述のように、律は ri dags zlog gi mdo の典拠とはいえない。

²⁴ 以下の「～も (kyang)」というのは同一人物がなしたということではなく、「あるものはこういうこととした」という意味であろう。

²⁵ BBhVy, D168b7-169a1, P208a8-208b2: de'i tshes dge slong rnams mi sdug pa bsgom par byed de/ mi sdug pa bsgoms nas lus rul pa 'dis ngo tsha zhing (D169a)(P208b) 'phyas smod (P: dmod) de/ des dmod pa'i bar du byed cing mtshon gyis kyang lceb par byed/ dug kyang za bar byed/ g-yang sar yang mchong bar (P: par) byed/ thag pas kyang 'gegs te 'chi bar yang byed pas *dge slong gyis* (P: om. * *) dge slong gosod par byed pa'i bar du byed de/

²⁶ C: Cone edition, G: Golden manuscript, N: Narthang edition.

1. イタリクスは、異読がないものの筆者の理解により採用すべきと判断した読み。2. ナルタン版（略号 N）は東洋文庫所蔵のものを用いたが、読みづらいため、ナルタン版のみに見られる異読は注記せず、あくまで他の版本に支持される異読のみ注記する。例えば、ナルタン版は特に母音の表記がかすれていて、dge が dga と見えたり、med とあるはずのものが mad に見えたりするが、表記しない。3. 行数はデルゲ版のもの。4. 太字は経名。

VyY, D113b5-114a3, P132b2-7:

[Q] de yongs su gtong ba'i (6) sems nyid gang yin pa de nyid 'dir zhe sdang ma yin nam zhe na/

[A-1] 'di sdug bsngal gyi chu po chen po las yongs su bskyab par 'dod²⁷ pas bdag la byams pa bas kyang lhag par byams pas/ der de nges par myong bar 'gyur ba'i las byed pa la mngon du phyogs pa'i lus pas phul du (7) byung ba'i lus gang thob par byed pa na/ de²⁸ yongs su btang ba gang yin/

[A-2] gzhan yang/

snying brtse ba'i bdag nyid dag gis sbyor ba gang gis// phan phyir gzhan gsod de ni skyon can na// (N123a) gang gis dge slong²⁹ drug cu la sogs shi³⁰// mdo gnyis thub pas bstan pa de ci'i (114a1) phyir//

mdo gnyis kyang

gang las

chos kyi nmam grangs 'di bshad (C118a) pa na/ dge slong³¹ drug cu kha nas khrag dron mo byung ste/ gnod pa de nyid kyis dus byas so

zhes 'byung ba **ljon shing gi phung po lta bu** dang/ (G167a)

gang las

de na bcom ldan 'das kyis³² dge slong (2) rnams la dge slong dag mi sdug pa sgoms³³ shig/ mi sdug pa bsten³⁴ cing

zhes bya ba nas

phan yon che'o

zhes bya ba'i bar du mi sdug pa bsten³⁵ cing/ mi sdug pa³⁶ bsgom³⁷ pa'i bsngag pa bshad pa dang/

de'i tshe dge slong³⁸ dag mi sdug pa bsgoms shing/ mi sdug pa bsgoms³⁹ pa na/ (3) rnag gi lus 'dis 'dzem⁴⁰ zhing⁴¹/

zhes bya ba nas

mtshon 'debs par byed cing/ dge slong gis⁴² dge slong gsod pa'i

bar du⁴³ 'byung ba **ri dags**⁴⁴ **zlog**⁴⁵ **gi mdo** yin no//

〈略号および使用テキスト〉

²⁷ P: 'dong ²⁸ DN: da ²⁹ DCPGN: sbyong, but read slong ³⁰ DC: shing ³¹ DC: sbyong
³² PGN: kyi ³³ PGN: bsgoms ³⁴ G: bstan ³⁵ G: bstan ³⁶ PGN: pa'i ³⁷ PGN: sgom ³⁸ C:
slang ³⁹ PGN: bsgom ⁴⁰ PG: 'jem ⁴¹ C: 'dzam zhen ⁴² PGN: gi ⁴³ DC: om. du ⁴⁴ G: dvags
⁴⁵ DC: bzlog

- 赤沼辞典: 赤沼智善『印度仏教固有名詞辞典』破塵閣書房, 1931。(京都:法蔵館, 1967. 復刊)
- 『撰大乘論釈』(**Mahāyānasamgraha-bhāṣya*): P No.5551, D No.4050.
- 『成業論』: 室寺義仁『成業論 チベット訳校訂本』京都, 1985.
- AKBh: *Abhidharmakośabhāṣya*. P. Pradhan ed., Tibetan Sanskrit Works Series 8, Patna: 1967.
- BBhVy: Sāgaramegha, *Bodhisattvabhūmi-vyākhyā*. P No.5548, D No.4047.
- MN: *Majjhima-Nikāya*. PTS.
- DPPN: *Dictionary of Pāli Proper Names*. G. P. Malalasekera, PTS.
- SN: *Samyutta-Nikāya*. PTS.
- TJ: *Tarkajvālā*. P No.5256, D No.3856.
- Vin(VP): *Vinayapiṭaka*. PTS.
- VyY: Vasubandhu, *Vyākhyāyukti*. P No.5562, D No.4061.

(参考文献)

Cabezón, Jose Ignacio

- [1992] “Vasubandhu’s *Vyākhyāyukti* on the Authenticity of the Mahāyāna Sūtras,” *Traditional Hermeneutics in South Asia Albany*, in Timm, J., ed., SUNY Press, Albany, pp.221–243.

Cutler, Sally Mellick

- [1997] “Still Suffering After All These Aeons: the Continuing Effects of the Buddha’s Bad Karma,” *Indian Insights: Buddhism, Brahmanism and Bhakti*, in Connolly, Peter and Hamilton, Sue, ed., Luzac Oriental, London, pp.63–82.

Hofinger, Marcel

- [1990] *Le Congrès du Lac Anavatapta (Vies des Saints Bouddhiques), Extrait du Vinaya des Mūlasarvāstivādin Bhaiṣajyavastu II: Légendes du Bouddha (Buddhāvadāna)*, Louvain.

Lee, Jong Cheol (李 鍾徹)

- [2001] *The Tibetan Text of the Vyākhyāyukti of Vasubandhu critically edited from the Cone, Derge, Narthang and Peking Editions*, 山喜房仏書林, 東京.

Tatz, Mark [1986] *Asanga’s Chapter on Ethics With the Commentary of Tsong-Kha-Pa, The Basic Path to Awakening The Complete Bodhisattva*, The Edwin Mellen Press, Lewiston.

Walters, Jonathan S.

- [1990] “The Buddha’s Bad Karma: A Problem in the History of Theravāda Buddhism,” *Numen* XXXVII-I, pp.70–95.
- 川崎 信定 [1992] 『一切智思想の研究』, 春秋社, 東京.
[2000] 「善巧方便と智慧——『中観心論』第十章「一切智品」にもとづく考察——」, 『加藤純章博士還暦記念論集 アビダルマ仏教とインド思想』, 春秋社, 東京, pp.237–250.
- 羽田野 伯猷
[1977] 「瑜伽行派の菩薩戒をめぐって」, 『鈴木学術財団年報』 14, pp.12–33.
- 平川 彰 [1970] 『律蔵の研究』, 山喜房佛書林, 東京.
[1993] 『平川彰著作集第 14 卷 二百五十戒の研究 I』, 春秋社, 東京.
- 藤田 光寛 [1977] 「瑜伽師地論菩薩地戒品に対するチベット語訳註釈書、最勝子註と海雲註とをめぐって」, 『密教文化』 118, pp.(96)–(80).
[1995] 「<菩薩地戒品>に説かれる「殺生」について」, 『密教文化』 191, pp.(152)–(136).
- 堀内 俊郎 [2004] 「世親の飲酒観——性罪と遮罪——」, 『佛教学』 46, pp.(159)–(177).
[2005] 「『釈軌論』の仏身論——變化身としての釈尊——」, 『仏教文化研究論集』(東京大学仏教青年会) 9, pp.45–61.
- 本庄 良文 [1992] 「『釈軌論』第四章——世親の大乗仏説論(下)——」, 『神戸女子大学紀要文学部篇』 25-1, pp.103–118.
- 山口 益 [1973] 『山口益仏教学文集・下』, 春秋社, 東京. esp. pp.315-317.

2005.12.8 稿

ほりうち としお 東京大学大学院博士課程

Lù-lín-fàn-zhì-zǐ 鹿林梵志子 in the *Samyuktāgama*, No.809:

In relation to the *Ri dags zlog gi mdo* cited in Vasubandhu's *Vyākhyāyukti*

Toshio HORIUCHI

In his *Vyākhyāyukti* (VyY), Chapter 4, Vasubandhu maintains that Śākyamuni Buddha, a historical figure, is an illusory manifestation (*nirmāṇakāya*). Having dealt with the former half of Vasubandhu's discussion in my preceding paper, I tried to elucidate here the latter half of the same topic.

In this article, first I pointed out that the latter half of Vasubandhu's Buddhakāya-theory found in his VyY was later cited in Sāgaramegha's *Bodhisattvabhūmivyākhyā* (BBhVy). In his discussion of Buddhakāya-theory, Vasubandhu clarifies the theory of *upāyakauśalya* "skillful means" in detail. By citing two scriptures relevant to this theory, Vasubandhu illustrates the fact that the *upāyakauśalya* theory is proclaimed not only in Mahāyāna, but also in Śrāvakayāna. Before the citation from those scriptures, a sentence of four lines is also quoted with an introductory phrase *gzhan yang* "furthermore". Comparing the sentence with its corresponding passage found in BBhVy, the sentence composed of four lines in VyY may possibly be understood as originally a verse.

Then, what can be questioned is the identification of the citation from both scriptures. As for the second *sūtra* therein called *Ri dags zlog gi mdo*, Skilling [2001] assumes that *Ri dags zlog* must be Migalaṇḍika who is said to have committed the fourth *pārājika*, i.e. killing, and concludes that the corresponding texts to this *sūtra* are found in Vin, Vol.III.68 and SN, Vol.V.320 (54.9.Vesālī). I am indebted to him for the assumption of *Ri dags zlog* as *Mi(ṛ)galaṇḍika; however, I rather conclude that the source of this *Ri dags zlog gi mdo* is *Samyuktāgama*, No.809, the Chinese correspondent of SN, Vol.V.320 (54.9.Vesālī). In order to demonstrate this fact, I examined the Chinese translation of the personal name "Migalaṇḍika-samaṇakuttaka/Mṛgadaṇḍika-parivrājaka" who is said to have been the first person in the Buddhist community that has committed the fourth *pārājika*, i.e. killing. From this examination, I have drawn the conclusion that the name Lù-lín-fàn-zhì-zǐ 鹿林梵志子 found in *Samyuktāgama*, No.809 must originally be Lù-zhàng-fàn-zhì-zǐ 鹿杖梵志子, which exactly corresponds to "Mṛgadaṇḍika-parivrājaka".